

令和7年3月15日

保護者の皆様
地域の皆様

さくらの学び舎 世田谷区立笹原小学校
校長 吉田 健二

次年度(令和 7 年度)に向けた改善方策

令和 6 年度笹原小学校学校関係者評価委員会による、「令和 6 年度学校関係者評価委員会報告書」により提言いただいた 12 項目について、次年度に向けた回答・改善方策を以下の通りお示しいたします。

項 番	提言	回答・改善方策
1	保護者アンケートの回答率を上げるため、回収率の進捗を示した依頼メールの送信など学校側の工夫があった。適正な調査のためには回答率も重要であるため、今後も維持できるとよい。	学校だより、すぐーる配信などを活用し、アンケート回収のお願いを継続する。回収率の見える化を図るため回収率の掲載も継続する。評価項目の精選等についても、来年度の学校関係者評価委員会で検討していく。
2	重点目標Ⅱに関する項目では、児童、保護者ともに肯定的な回答率が上昇した。本校では、多様性を自分や他者の「良さ」として受け止める雰囲気醸成されていると考えられる。	来年度の重点目標に「人権意識(やさしい心、思いやりの心、多様性を尊重できる心)をもった子どもの育成」を掲げ、引き続き他者の「良さ」を受け止められる子の育成を図っていく。
3	重点目標Ⅲに関する項目では、児童の肯定的回答率は昨年度より上昇した一方で、保護者の肯定的回答率が昨年度より低下した。保護者の肯定的回答率の低下は、コロナ禍で子どもたちに様々な制限を強いらざるを得なかった状況が改善されている表れともいえるだろう。一方で、児童の回答率は上昇している。コロナ禍を経て、うがいや手洗いという行動は日常的な習慣であるという健康意識が、子どもたちの間には定着しているのかもしれない。	コロナ禍後においても、コロナ禍では流行しなかった感染症の流行が続いている。また今後、未知のウイルスの発生や流行にも備えていく必要がある。コロナ禍で身に付けた基本的な感染症対策については、日常化できるよう教育活動や保健指導を継続していく。
4	読書活動に関する項目の肯定的回答率は、この 5 年間で徐々に低下している。読書による語彙力や知識、読解力や想像力、集中力の育成や、没頭経験、全身をつかって本と向き合う体験を通した子どもの発達を保障するために、読書活動や読書習慣の育成・評価に力を入れることも必要であるが、現代の子どもが経験する言語環境を踏まえた「読む」をどのように育成・評価できるかを検討することも必要かもしれない。	朝読書や学校図書館の効果的な活用、読書月間の取組等を継続し、読書活動の充実に取り組む。また、社会環境の変化の中で、紙の媒体による読書離れの進展が活字離れにつながらないように、学習用タブレット端末のブックアプリの活用やデジタル環境下での読書やテキスト読解等の調査も模索していく。
5	異年齢たてわり班活動である「笹の子班活動」は年度により多少の上下はあるものの、5 年間を通して高い肯定的回答率を維持している。今年度の卒業文集	笹の子班活動に継続して取り組んでいく。下学年の児童が上学年の児童の活躍に憧れを抱いたり、上学年の児童が下学年の児童の

	では、かなりの児童が「班長になった」「お世話するのが楽しかった」等、笹の子班活動について触れられる。そのような子どもたちの成長を保護者も見て感じているため、アンケートで「有意義である」と回答されているのかもしれない。	お世話を通して自分の成長を実感したりすることが小学校段階でのキャリア教育にも繋がるという意識を持って、学校全体で指導していく。
6	児童アンケートでは、「授業では、考えたことを話したり発表しあったりする機会がある」に対する肯定的回答が高水準とはいえ、昨年度よりも低下している(88.4→86.4)。また、「私は、家庭や宿題で e-ラーニングでの学習をしている」に対する肯定的回答は、約 10 ポイント上昇した(53.4→61.4)。児童の肯定的回答の多い項目の上位には、「先生たちは、ていねいに指導してくれる」(92.9)、「先生は映像やタブレットを工夫し、わかりやすい授業をしている」(88.6)、「学校生活は楽しい」(87.2)が挙げられていることから、本校での今後のICT活用の可能性の幅は大きいと考えられる。	自律的な学びを支える、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図るために、学習用タブレット端末を活用していく。学習用タブレット端末を活用した単元・授業・個別学習を構想し、日常的な実践を図ることにより、「探究的な学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」の充実につなげる。
7	あいさつに関する項目では、児童の肯定的回答が 63.4%から 83.5%と大きな上昇がみられたことに対し、地域の方々の肯定的回答率は 52.6%から 62.9%と上昇の幅に違いがみられた。ここにも、日常生活や人との関わりに多くの制限をせざるをえなかったコロナ禍の残響があるように見受けられる。あいさつといった日常的なものは、地道な日々の積み重ねにより習慣化していく性質がある。まずは現状の取組を継続することに意味があると考え、学校内での毎日のやりとりが、徐々に児童の地域での行動変化にも波及していくことに期待したい。	毎月実施する「あいさつ週間」の取組を来年度も継続する。また、あいさつ週間以外においても学校内であいさつを励行し、日常的にすすんであいさつができる子どもを育成する。その際、学校内だけでなく、家族や地域の人たちにも挨拶の輪を拡げていくことの価値を児童に伝えていく。
8	本校を象徴する存在として“ポプラ”があることが委員内から情報提供された。卒業式にポプラの挿し木が贈られていたり、本校オリジナルの「ポプラの歌」を歌ったりする伝統があったほどである。数年前の倒木により今は存在しないが、令和 6 年度末には新たに植樹する記念集会の開催予定があり、地域の方々も招待される。これを機に、あらためてポプラをシンボルとした教育的取組が実施されるならば、それが本校独自の新しい教育活動となる可能性がある。	2月5日に在校児童代表として6年生がポプラの植樹を行い、2月13日に地域の方々を招待し「ポプラの木集会」を行った。来年度は、ポプラの若木の生長を見守りながら、開校記念集会や運動会等の学校行事の機会を活用し、ポプラをシンボルとして学校への帰属意識を高める取組を行っていく。2年度の学校創立 70 周年に向けて盛り上げていく。
9	児童アンケートの「区立中学校に関する情報が提供されている」と「学び舎の中学校に行ったり、中学生が来たりする機会がある」の肯定的回答は低下しているが、保護者アンケートの「学び舎の区立中学校について情報が提供されている」の肯定的回答率は横ばいである。多様な情報が溢れかえっている現代では、必要なときに必要な情報にアクセスできる情報提供に重きが置かれているのかも知れない。	同じ学び舎である桜丘中学校との交流(学び舎あいさつ運動、本校児童の中学校体験、中学校生徒会による本校訪問等)を継続して行うとともに、交流の様子や同中学校の情報について児童や保護者に伝える機会を創出し、意図的に発信していく。

10	<p>本校では全学年で「わくわくシート」「のびのびシート」「ぐんぐんシート」というワークシートが目的別に活用されており、高学年になると職業調べを実施している。児童は、これらのシートを見返すことで、自分が重ねた努力の道筋を確認することができる。この取組も「わたしには努力できることがある」、「目標もち、その実現にむけて努力している」という肯定的回答率の上昇と関連しているかもしれない。</p>	<p>「わくわくシート」「のびのびシート」「ぐんぐんシート」の取組を継続し、子どもたちが自己の活動を振り返り、めあてを設定する機会を引き続き設けていく。</p> <p>また、学校内外の子どもたちの頑張りを称える全校表彰を定期的に行い、「努力」することの素晴らしさを価値付けていく。</p>
11	<p>「キャリア・未来デザイン教育」に関する評価項目における全体的な肯定的回答率の低さは、「キャリア」という言葉が一般的にどのように理解される傾向があるかを踏まえて検討する必要があるだろう。文科省によるキャリア教育の手引きでは、小学校段階では、低学年は学校の適応、中学年では友達づくりや集団の結束力づくり、高学年では集団の中での役割の自覚や中学校への心の準備、という段階を経て発達するという視点を持って、児童のキャリア教育を進めることの重要性が指摘されている。保護者や地域の方々が集まる何らかの機会に、教育領域の「キャリア観」について説明する場を設け、その活動を継続的にでも実施できるならば、本校で実施されている「キャリア教育」に関する理解啓発ができるのではないだろうか。</p>	<p>キャリア教育については狭義の「職業教育」だけでなく、「集団の中での自分の役割の自覚」や「成長を振り返り、少し先の自分の未来を想像する」なども含めたものとして、発達段階に応じて進めていく。また、普段は身近な大人が働く機会を見ることが少ない子どもたちにとって、子ども縁日やどんど焼き、餅つきなどの本校独自の地域行事は、自分の身近な大人たちが協力して働く姿を見られるよい機会である。このような場も積極的に活用して、協力して働くことの素晴らしさを価値付けていく。</p> <p>上記のことについて、保護者や地域の方々へも発信し、「キャリア教育」への理解啓発を図っていく。</p>
12	<p>昨年度の総合所見では、気になる徴候として、年々落ち着きのない児童が増加していることが挙げられている。今年度の報告では、対象(児童・保護者・地域)毎のアンケートの全体結果を分析し考察してきたが、学年毎の分析においては、アンケート協力者の心の内にある憂慮の表れとも憶測できる回答も見られた。実際、今年度1学期に委員が初めて学校訪問した際にも、確かに前年度に指摘されている状況があった。この種の問題は、解決までに直線的な推移を辿ることはほぼなく一朝一夕な変化を期待することも困難であろう。変化するとすれば、おそらく、その形状は不連続な螺旋状で時には、一進一退もあると予想できる。変化の過程では構成員一人ひとりの問題に向き合う姿勢と根気強い実践が求められ、長い目で見守る必要があるだろう。また、学校全体としての継続的な取組も、変化を促す鍵となるだろう。</p>	<p>令和6年度学校関係者評価報告書における様々な項目の分析において、児童、保護者の肯定的な回答率が上昇していることについて言及があった。しかし、学年別に見てみれば、ばらつきがあり全体傾向だけで判断することはできない。学年別、学級別の状況を把握しながら、人的リソースが限られた中で、個別最適と全体最適のバランスをとりながら適切に学校運営を行っていくことが求められる。そのためにも、教職員の協働態勢の充実を図り、「チーム笹原」としての学校運営を推進する。そして何より、教職員に欠員が生じる事態は、学校の状況を一変させるリスクとなる。教職員の心身にわたる健康の維持を図り、教育活動の安定的な実施に注力する。</p>